

【論 文】

中島敦「章魚木の下で」論

——島木健作『満洲紀行』の影響を中心に——

橋 本 正 志

【要 旨】

中島敦の遺稿「章魚木の下で」(一九四三)には、島木健作『満洲紀行』(一九四〇)の影響が見てとれる。小論では、中島の日米開戦当日のサイパンでの『満洲紀行』の繙読が、後の「章魚木の下で」における同時代文学批判へと展開していく過程を明らかにした。島木の「人間」に対する興味と、「文学者の眼」による国策への「批判的な考察」に対する強い共感が、中島の晩年の文学的根幹を形成していたことを指摘した。

【キーワード】

満洲開拓、南洋群島、戦争と文学、現代の良心、文壇批判

はじめに

「山月記」「文字禍」で文壇登場を果たした中島敦(一九〇九—四二)は、アジア太平洋戦争開戦から数カ月を経た一九四二年(昭一七)三月半ばに南洋パラオから帰京し、いわゆる(内地)での「奇蹟の八か月^①」と呼ばれる充実した創作期間を迎える。その最後の作品となった随筆「章魚木の下で(遺稿)^②」は、次のように始まっている。

南洋群島の土人の間で仕事をしてゐた間は、内地の新聞も雑誌も一切目にしなかつた。文学などといふものも殆ど忘れてゐたらしい。その中に戦争になつた。文学に就いて考へることは益と無くなつて行つた。数ヶ月してから東京へ出て来た。(中略)本屋の店頭に堆く積まれた書物共を見て私は實際仰天した。久しぶりで文学作品を読むと流石に面白くはあつたが、南洋呆け^③して粗雑になつた私の頭には、稍と微妙に過ぎ難解に感じられることが無いではなかつた。(二二頁。傍線・引用者。以下同じ)

この「章魚木の下で」は、木村一信氏によれば帰国時の「現実の変化に対する異和感と失望感^④」をモチーフとして書かれたものであり、同時代の文壇との中島の向き合い方についても、すでに同氏によって子細に検討がなされている。すなわち、「昭和十六年から十七年にかけて急速に挙国一致体制の中にくみこまれていった文学界の空気をとらえた中島の、鷗外流にいえば『二国の一時代の風尚に肘を掣せられ』ることを拒む、文学者としての確かな眼」があり、また「現実に眼の前にした日本の文学が、中島の思い描く文学の世界とはすっかり違っていたことへの失望に近い気持ちから発せられた言葉ではなかつたか^⑤」と。

おおむね首肯できる評価であるが、ただし、先の「章魚木の下で」の引用部分のもとより、全体の内容としても、転向作家・島木健作

(一九〇三・四五)の『満洲紀行』(創元社、一九四〇・四・八)に記された内容、とくに後半に収録されたエッセイ「ある読書」「感想」「旅の手帳から」の三編の趣旨や主張と多くの共通点が見出せることは指摘されていない。中島は開戦当日の午後、サイパン島で島木の『満洲紀行』を実際に読み、その日記に「面白し。蓋し、彼は現代の良心なのか」と最大の評価を記していたことに着目してみたい。

島木も「満洲」旅行から帰国して一月余りの間、「開拓地農業について書かれたさまざまな文書」(二七三頁)を読んで暮らした一方、実際に「満洲」を歩いてきた自分の「眼」を通して判断すると、それらの「書物」には全く「実情」が反映されておらず、「憂鬱」と「忿懣」の思い(二七三頁)を募らせざるを得なかった失望感を中島同様に吐露している(「ある読書」)。

もちろん島木と中島では、「満洲」と「南洋群島」という滞在地の違いはあるが、ともに〈外地〉から〈内地〉への帰国後に執筆された〈内地〉の文壇に対する批判を主目的とした文章である点は共通している。つまり、〈外地〉での自らの見聞や体験に基づいた、〈内地〉視点のみに立脚した書物(あるいは時局的な著者の姿勢)と〈内地〉の言論界に対する明確な批判的姿勢はほぼ同様のものがあり、また、同時代における文学者の望ましいあり方を模索し、現状に不満を持ちながらも、文学それ自体の価値や可能性を高く見出している主張も通底しているのである。島木は「ある読書」において、さらに次のように述べている。

どの本にも開拓地の実情といふ章はある。しかしながらそこに書かれてゐるものは、実情ではなくしてじつは机上の設計書なのである。(二七六頁)

昨年来、多くの文学者が満洲に渡つた。開拓地をも見て文章を

書いた。(中略)私も彼等とおなじ文学者であつてみれば、提燈を持つよりは、不満な点を述べた方が見よいであらう。しかし今度多くのものをよんでみて、いかにそれが不十分なものであれ、今日の満洲開拓地を伝へてゐるものとしては、これら文学者たちの断片的な記述以外にはないといふことを私は信ずることができた。(中略)文学者の眼は、他のどのやうな著者よりも真実を見ているのである。(二八四頁)

中島は日米開戦当日、こうした「文学者の眼」で「真実」を見極めようとする島木の文章に直接触れていたためであり、国策の時代において「提燈を持つよりは、不満な点を述べた方が見よい」という『満洲紀行』を貫く姿勢から少なからぬ影響を受けたのではないだろうか。すなわち、後の「章魚木の下で」執筆に際して、島木の『満洲紀行』の内容を自らの主張の基盤を形成する一つの視座として援用していた可能性が指摘できるように思われる。中島は、最終的に「章魚木の下で」において、

自己の作物に時局性の薄いことを憂へて取つて付けた様な国策的色彩を施すのも少々可笑しい。(二三頁)

却つて文学を高い所に置いてゐるが故に、此の世界に於ける代用品の存在を許したくないだけのことである。食料や衣服と違つて代用品はいらない。出来なければ出来ないで、ほんものの出来る迄待つほかは無いと思ふ。(二四頁。傍点・原文)

と主張するに至るが、中島は開戦当日に読んだ島木の『満洲紀行』の内容に大きな影響を受けながら、それを深めるかたちで「章魚木の下で」の自らの主張を明確なものにしていったと考えられる。

小論では、如上の仮説に基づいて、まず島木の『満洲紀行』の内容を、そこに収録されたエッセイにも触れて検討した上で、中島の遺稿「章魚木の下で」において展開された同時代文学批判の形成の過程とその意義を明らかにしていきたい。

一 「面白し」の基底をめぐって

中島敦は、一九四一年（昭16）七月から翌一九四二年三月半ばまで南洋庁編修書記としてパラオに赴任した。当時の日記（『南洋の日記』）によれば、島民児童を対象とする（公学校）の視察目的でサイパン島に滞在していた一九四一年十二月八日早朝、サイパン支庁へ向かう途中で日米開戦の報に接している。

午前七時半タロホホ行のつもりにて支庁に行き始めて日米開戦のことを知る。朝床の中にて爆音を聞きしは、グワムに向ひしものなるべし。（四八六頁）

中島は「小田電機」で続きのニュースを聞き、また向かいの「陸戦隊本部」はすでに出勤がなされた後であったことを知る。そこへ新聞記者らが号外を刷って持ってくるなど、しだいに慌ただしさを増していく町の様子を克明に書きとめている。中島はラジオの前に「蝸集」する人々を見ながら、正午前のニュースで「宣戦の大詔」「首相の演説」などを聞いた後、騒然たる雰囲気の中を帰ったようである。中島は同日の日記に、続けて次のように記している。

午後、島木健作の満洲紀行を読む、面白し。蓋し、彼は現代の良心なるか。（四八六頁）

島木健作が一九三九年（昭14）の春から夏にかけて、一人「北満」を歩いた「百日ぐらゐの旅」（五頁）の記録『満洲紀行』は、この日米開戦の前年、一九四〇年（昭15）四月に創元社から刊行された。本書は中島の蔵書目録^⑤には見当たらないことから、おそらくサイパン島滞在中に入手し、その日のうちに読了したのであろう。

この島木の『満洲紀行』に対する「面白し」との感想からは、中島が終始興味をもって本書を読んだことが窺え、その具体的な内容や「彼は現代の良心なるか」との評価の詳細は不明であるが、ここでいう「現代」とは、今朝方戦争の口火を切った（現在）を含んでいることは言うまでもない。また、「蓋し」との表現からは「良心」という善的なものへの関心と、それが単に表面的なものにとどまらず、「開戦」を念頭に置いた上での島木への何らかの〈強い共感〉を抱いていたことが窺える。このように中島が、開戦当日の午後、島木の『満洲紀行』を読み、そこに描かれた島木の作家的態度に対して「現代の良心」と評したことの意義を順に探っていききたい。

まず、中島が島木の『満洲紀行』に感じた「面白」とは一体何であったのか。以下に『満洲紀行』の目次を挙げて、本書の内容を確認することから始めたい。

序文／北満開拓地の課題／新たな出発／満洲旅日記抄／勃利にて／興農鎮の一夜／孫呉にて／車中瞥見／齊々哈爾から訥河まで／満洲の日本人の生活／満洲の農家／満洲へ旅する人にある読書／感想／旅の手帳から／青服の人

島木は「序文」（本文には「序」とある）において、本書が「満洲」の「新しい建設への愛情」ゆえの「批評」であり、「遠く旅をし、我が足で歩き、我が眼で見て、感じたところ、思ったところを率直に述べる」（二頁）姿勢を重視している。それは「日本の文学者によつて

書かれた多くの旅行記」に欠けている点であり、「自分の意見」を持つことの必要を説きつつ、旅の成果は「今後の自分の文学の仕事のなかに生かされてゆく筈である」(三頁)と今後の希望的観測を述べている。

こうした緒言からは、「満洲国」そのもの是非やその「建設」自体への直接的な批判を見出すことはできないが(もちろん韜晦的な姿勢を貫くことで「満洲批判」^⑥を繰り広げようとしていた可能性もないわけではないが)、『満洲紀行』に底流している傾向として、おおむね国策や時局を追認した上での開拓地の問題への(批判的考察)となつて指摘できる。たしかに田村修一氏の「露骨な国策賛美の作品が排出される風潮に、確実に冷水を浴びせた」^⑦という指摘は正鵠を射ているといえよう。

すなわち、本書を貫いている基本的な姿勢として、「自分が実地において見もし泊つてもあるいた開拓民の家庭の、実際の状態から推していふ」(二四頁)との立場表明からも明らかのように、まずは現地体験に根ざした個々の具体的な政策やその方針への批判であり、「満洲国」経営という国策自体は前提として認める立場でありながら、ただし、それが実際の生活における諸経費等に至るまで、開拓民の置かれた(実情)に基づいて提言されている点の特徴として挙げられるのである。開戦当日に中島の感じた「面白」さの背後には、こうした島木の「机上の設計書」にとどまる「書物」への批判的姿勢、換言すれば、決して「提燈」を持つことなく「満洲」の(実情)を覗る島木の「眼」そのものがまずは興味深いものとして受けとめられていたといえよう。

実際に、移民団の農業経営の実態として、「家族労力」よりも「満洲人の労働力」(二五頁)への依存が不可欠となっている現実を告発する場面が描かれ、同様に「満洲人」の労働者は一般に「苦力」と呼ばれているものの、それは正しくなく、「今まで開拓地内にあつた原

住民であつて、日本開拓民が入つて来たために、早晚この土地を去らねばならぬ運命にある」(二六頁)と彼らをあくまで同情的に受けとめ、そうした「満洲」への「依存」(二八頁)あつての開拓であることを再三指摘している。他にも、日本の開拓民は品種改良において分がある一方(四四頁)、農法においては「満洲」の方が優れていることや(四五頁)、むしろ農耕技術を高め、「個人経営」ではなく「共同経営」でこの困難を克服すべきであるとする具体的な提言もなされている。「満洲」の農法を評価する一方で、日本人が他者の土地へ侵入する手段で「生活」を成り立たせることの難しさや、それにとまなう「満洲」農民の不幸(三三九頁)を見てとり、「満洲」を雇用するにしても彼らへの賃金を上回る利益を生み出す「経営」が必要となる、といった国策の背後に横たわる(現実的な困難)も繰り返しあぶり出している(二四一頁)。

『満洲紀行』後半の「満洲の農家」に至るまでがこうした旅行時の記録と考察であり、「満洲へ旅する人」から巻末にかけては帰国後に執筆されたエッセイ四編が収録、最後に小説「青服の人」が付されている。もともと島木は「北満」を一人歩いた動機として、開拓地を「自分自身の眼でしっかりと見ておきたかつた」との思いを挙げ、「五族協和といふ壮大な夢が実現に向ひつつある姿が見たかつた」(四頁)と表明していたことから、中島の『満洲紀行』への関心の根柢には、現地において「何かはげしく、真剣なものなかで我身をゆすぶられたいといふ、作家のねがひ」(四頁)や「きびしさを欲する」(五頁)といった島木本来の志向が関わっていた可能性も指摘できよう。

二 「現代の良心」とは何か

今少し島木健作『満洲紀行』の内容を確認しておきたい。本書においては、

満人部落に深く入りこみ、汗と垢とにまみれ、蠅と蚤と南京虫とおそはれながら、長年月にわたる民族間の土地紛争の解決のために力を尽してゐるやうな日本の青年に接したときには、感動の涙がにじんだ。(六六頁)

と、巻末の小説「青服の人」の主人公・苗場信助のモデルとなった人物たちとの出会いが描かれており、實在の彼らからの強い感銘をもとに「人間の生き方」の追究が試みられていたようである。とりわけ「K氏」という三十歳前後の青年や、年配の「T氏」の姿については、

自分の頭で考へ、一つの目標を樹て、一つ一つ自分の肉体で経験しながら、何かを積み重ねるやうにしてその目標に近づいてゆく。思考と計画と実行。そこに見られる地道な一貫性は、こころよく我々の心を打つ。(一一六頁)

T氏は、短く刈つた頭髪にもう白いものがまじつてゐるやうな年配である。この人からも、時として大きな声が出るであらうかと思はれるほどの物静かな態度で話す。(一二二頁)

と記されており、明らかに「青服の人」の苗場信助の人物形象に活かされていたことがわかる。自身もまた、勃利にて作家の伊藤整、福田清人、湯浅克衛と期せずして出会い、「同時代の作家への親しさを深めること」(一三四頁)ができた喜びを記している。自らのような「転向者」にとつても、「満洲」の地は、過去を問われることなく才能を発揮できる、一種の文学的な「再出発」の場でもあったようである。

さらに島木は、「ある著者たちのつくつた数字にたいして私が不満なのは、それらの数字が事実を説明してゐないといふことと共に、それらが人間らしさを欠いてゐるからである」(六一頁)と「机上の設

計書」ではなく、現地に渡つた開拓民の「生きる姿」にきちんと向き合うべきであることを主張する。島木はある義勇軍訓練所から出された「生徒の文集」を読み、「日常生活のありのままの姿」(二五六頁)が描き出されていることを期待していたものの、しかしそこに彩られた国策的言辞の「不自然さ」に失望を禁じ得なかつた心境も綴られている。

こうして開拓民の子どもたちの「声」を書きとめようとする一方で(二五一頁)、現地の「満洲人」住民への関心(とくに彼らの内面への関心)は希薄である印象は否めない。「苦力」を雇用することの是非は問題視せず(六五頁)、ときに「彼等は何を考へてゐるのであらう」(七三頁)、「たとへ向ひ合つて話す機会があつても、その胸奥は私達旅行者にはつかめない」(同頁)などと半ば傍観的に触れる程度に過ぎない。これらの表現から「満人」に対して一定の関心はもつ反面で、同時に彼らとの「距離感」や「埋めがたい溝」の存在も浮かび上がってくる。

ただし、注目すべきは、「満洲の農家」には現地の「炊事夫(大^{ドイツ}師夫」(二三七頁)の少年との交流が描写されていることである。日本人の姿のみにとどまらず、現地に暮らす人々の内面が掬い取られた数少ない貴重な部分もないわけではないことである。「学生の身でふらりと満洲へやつて来」たという協和会の「T君」が、しだいに打ち解けてきた十七歳の「大^{ドイツ}師夫」に「学校へ行つたことがあるか」と問うと、「ない」と答えた「大^{ドイツ}師夫」の様子を次のように書きとめている。

さう訊かれ、さう答へてから、急に何か浮かぬ顔つきになつた。話がほかへ移つてしばらくしてから、突然、学校へ行つて本が読めればそれに越したことはない、おれだつて金があればさう出来たしさうしたのだ、とやや怒つたやうに言つて、いかにも口惜しさうであつた。(二五一頁)

中島が先の日記で評価した通り、こうした『満洲紀行』の記述はたしかに「良心」的であるがゆえに、結果的に国策に翻弄され、そこへ文学者としての才を投じざるを得なかった島木の（痛ましき）も一方で感じさせるものであるが、ともあれ、こうして島木は「我が足で歩き、我が眼で見て、感じたところ、思ったところを率直に述べ」（二頁）、「文学を仕事とする一旅行者の感想」（七六頁）を縦横に綴っていく。島木は、さらに「孫呉にて」の中で、次のように記している。

満洲を旅行してあるあひだ、いつも私をとらへ、さうして一番つよくとらへてゐたものはやはり人間に対する興味だつた。新しい国満洲国がどのやうな人間をつくり出しつつあるか、日本の私達の周囲にないどのやうなタイプの人間がそだちつつあるか、都会を行き、農村を行き、どのやうな団体、どのやうな機関をたづねても、私の関心はそこをはなれなかつた。生きた人間の形成にあらはれた積極的な肯定的なもの、消極的な否定的なもの、それを通して満洲を理解しようとした。（一七一頁）

開戦当日に中島が島木の『満洲紀行』を読んで書きとめた「彼は現代の良心なるか」との一言は、おそらく本書に顕著に認められる「人間に対する興味」、すなわち国策の時代に生きる者の「人間らしさ」とは何かという問いに基づいた「人間の形成」のありようを、あくまで（外地）における実生活上の観点において追究する文学的姿勢に対してなされた評価ではなかつたか。「人間に対する興味は島木の旅を貫いている^⑧」とする王玲玲氏の指摘の通り、島木は「人間」重視の立場を自らの主張の基底に据えているといつてよい。そして、現地の日本人が実は自らの子どもを「満洲」では育てたくないと内心不満を抱いている具体的事例も写しとつている。

満洲国の人々の私達への言葉は、力強く美しく立派である。しかしその人々のなかに、自分の子供はここで育てる気にはならぬ、少くとも学校だけはここでまさせる気になれぬ、とさういふことを口に出していふ人もあるし、口にはぬまでも実際さうしてゐる人が多いのだ。私はその人々の気持はわかるし納得する。（一八〇、一八一頁）

このように、島木は「生活のきびしさといふこと、生活とはたたかひであるといふことを、私はしみじみと感じないではあらぬのだつた」（二三三、二三四頁）と「人間」の「生活」のあり方への関心を大きな主題としていることは見逃せない。その上で、島木は「五族協和」の理念が一瞬で壊される脆弱なものであることを危惧し、現地の「満洲人」に対する日本人のぞんざいな扱いにあらためて失望を禁じ得ず、それに「おそろしさ」すら抱き、「日本人の満洲への進出といふことについてはさかんに説く人も、日本人と満洲の原住民との関係といふことについては、案外に思ひをひそめることの少ない実例を、私などでさへも知つてゐる」（一九〇、一九一頁）とあくまで率直に記している。

何よりもまた、「満洲国」の高級官僚自身が「国」の銀行を信用していない姿を見て、「民族協和の国の建設の並大抵でないこと」（二三四頁）に思いを馳せていることも重要である。こうした批判は、意外にも当時検閲にあたる内務省警保局内において「本書は著者の経歴と良心」によつて他の「無責任極まる見聞記とは類を異にしてゐる」内容であり、「今日、一読に値する書」と評される^⑨ほどであった。

中島は、おそらく『満洲紀行』に展開された島木の現地の諸問題と批判的に向き合う文学者としての「興味」「関心」のありようを真摯なものとして受けとめ、彼の現地社会における「生きた人間の形成」に注ぐまなざしに「良心」を感じたのであろう。折しも中島は、当時（サ

イパン公学校」で酷烈な（皇民化教育）の現場を視察して、「この公学校の教育は、ずるぶん、ハゲシイ（といふよりひどい）教育だ。まるで人間の子をあつかつてゐると思へない。（中略）こんな教育をほどこす所で、僕を作る教科書なんか使はれては、たまらない。今の教科書で十分なんだ^⑧」と妻に打ち明けていた。まさにそのサイパン滞在中に開戦を迎えた「現代」においては、たとえ地域は異なれども「人間」そのものを重視する島木の姿勢はまぎれもなく貴重であり、「現代の良心」に足るものとして受けとめていたのである。

三 「旅の手帳から」「ある読書」「感想」の影響

中島敦に与えた島木健作『満洲紀行』の影響は以上にとどまらない。次に、二〇〇〇年に発見された中島によるエッセイ「旅の手帖から^⑨」のうち、「書物」という小題が付された一節を見ていく。その冒頭と末尾は次の通りである。

シヨペンハウエルによれば、読書とは、自ら思索する労を避けて、その代り他人の思索の跡を辿ることであり、独創的な人間の選ばざる所だといふ。この筆法で行くと、南洋は、実に獨創性を養ふに適した環境だ。まるで書物が無い。書物を取寄せる便宜もない。（一六頁）

一体、南洋には本が来ないから、人々は読書しないのであらうか？ それとも、てんで需要が無いから、南洋には本が来ないのであらうか？ そして又、その需要の無いといふのは、南洋に住む人々が、（此の文の冒頭に書いたシヨペンハウエルの所謂）獨創性に富み過ぎてゐるからであらうか？ と。（一七、一八頁）

こうした西欧の哲学者や知識人の警句を引き合いに出しながら展開する方法は、島木の『満洲紀行』に収録されたほぼ同名のエッセイ「旅の手帳から」の末尾にも同様に見られる。島木はフランスの小説家アンドレ・ジイド（一八六九〜一九五二）が『ソヴェト紀行』の中に書いた、同じくフランスの小説家ウージェヌ・ダビ（一八九八〜一九三六）の「死の数日前にその手帳に書きつけた」という一文を引用する。すなわち「孤独と沈黙に対する何と深い欲求が、僕のうちから果食うてゐることだ」（三二〇頁）と。そして「ダビとはちがふ心からではあつても、私もまたそれを書きつける。長い旅をつづけ、たくさんの人々に逢つてゐるうちに、さういふ欲求は段々強くなつて行く。精神と肉体の疲れからばかりではない。しかし言ふべきことは言はねばならないだらう」（三二〇、三二一頁）と結んでいる。

またこの直前には、以下のような「読書」の「目的」や「本」の「読み方」をめぐる考察がなされており、中島の「旅の手帖から」（「書物」の項）は、次に引用する島木の「旅の手帳から」の内容から直接影響を受けたものである可能性が高い。

私など、東京へ出たのは、本が読みたいばかりにでした、といふやうな青年に私は逢つた。その人が本が読みたいといふことは、今もべつに変らなかつた。ただ、今は、昔よりはもつと目的のある、彼自身の生活に緊密に結びついた読み方をしてゐるのだつた。読書欲といふものが、それだけ落ち着いて来てゐるともいへるのであつた。彼は農業に関する本を中心に読んでゐるのだつた。得た知識は、實際生活のなかですぐにもためすことができた。（三一九、三二〇頁）

中島は「旅の手帖から」（「書物」）の中で、雑誌はともかく「書物らしい書物は何一つ手にはひらない」「何としても南洋には本が来な

いのである」と、むしろ「南洋群島」の読書事情に対して皮肉を述べらるる点に重きを置いているが、

雑誌といふ雑誌は何時も月遅ればかり。(中略)しかし、妙なもので、そのうちに私は月遅れ雑誌の或る一種の読み方を覚えて来た。(一六、一七頁)

と、島木と同様の表現(「読み方」)を用いており、明らかに影響があったと判断してもよいのではないだろうか。すでに仲程昌徳氏は、中島の「旅の手帖から」全体の執筆時期について「昭和十六年十一月二十八日から昭和十七年一月二十七日迄の間」と特定し、「日米開戦」時と時を接して書かれていたことはまず間違いない¹²⁾と推定しているが、「旅の手帖から」の「書物」の一文に限って言えば、執筆の範囲はさらに狭まり、中島がサイパン島で島木の『満洲紀行』を読んだ一九四一年十二月八日午後以降になると推測してよいと思われる。さらに島木の「ある読書」には、以下のような一節がある。

私は自分の足と眼とをもつて、実際の状態のいくらかを見て来てゐる。(中略)その眼をとほしてすべての文章を見る。当然批判的な読みとり方である。(二七六頁)

この「批判的な読みとり方」に象徴される態度は、これまで何度も確認してきた通り、『満洲紀行』を貫く島木の基本的姿勢である。その姿勢において、「すべての文章」を読んでも「開拓地の現状を思ひうかべることは到底できなかつた」と失望し、多くの書物が「机上の設計書」(二七六頁)であると強く「批判」する点に加えて、

いつたいに、今日世間に流布してゐる満洲開拓地に関する書物

は、大部分が糊とハサミ的といつていひすぎでない。(中略)その著者自身の見聞も、研究も思想もないのである。(中略)今日の段階における、具体的な事実の進行についての批判的な考察のなかにこそ、読者は必要をも精神をも読みとり、感じとるのだといふことを著者らは思はぬのであらうか？(二八〇、二八一頁)

と、現状についての「批判」を積み重ねていく島木の叙述の方法も、後の中島の「章魚木の下で」において同様に用いられている。それは帰国後に多くの文学に関する「書物共」を見て、「自己の作物に時局性の薄いことを憂へて取つて付けた様な国策的色彩を施すのも少々可笑しい。(中略)書けなければ書けないで、何も無理をして書かなくともいいのではないか」との提言や、「氣負ひ立つた外面の下に隠された思考忌避性」を批判する筆致として取り入れられている。

すなわち、中島のエッセイ「旅の手帖から」「章魚木の下で」にみられる島木『満洲紀行』との類似性を挙げて判断すれば、中島の文章は、すでに国策の「提燈を持つ」ことへの強い「批判」を繰り広げていた島木の文章と無関係であるとはいえず、むしろ中島が後年「章魚木の下で」に結実させていく自らの文学的根幹として『満洲紀行』の表現を受容して、いつたことの証左ではなからうか。

同様に、中島の「章魚木の下で」への島木の「感想」からの影響も指摘していききたい。島木は、自らが書いた文章について度々聞かされたこととして、「言ふべきことがあつたら直接(仕事の担当者である)我々に言つてもらひたい。ほかで言つたり、書いたりしても何にもならぬ」(二九一頁)というある役人の言葉を挙げて、強い不満を表明している。少し長くなるが、その部分を引用する。

私はこれほどまでに高ぶつた、不遜な言葉といふものを多くは知らない。これほどまでに官僚の氣質を露骨にあらはした言葉も

知らない。(中略) 私達は新しい土地に旅行をし、さまざま人間の生活を見、感想を持つて帰つて来る。私達はその得たものを、一体、誰に向つて告げようとするであらうか? 私達はそれを、いふまでもなく、広く国民に向つて告げようとするのである。官吏ならば何を措いても先づ上司に向つて復命報告をするだらう。(中略) 私達は国民の一人として、国民に伝へ国民がその問題について考へる何等かの助けとなることを欲するのである。それが文筆の徒の任務である。また私達の「協力」の方法でもあるのである。(二九一、二九二頁)

批評はつねに多少ともに苦言である。苦言のなかにこそ誠意がひそむのである。協力とは人の苦言を受け入れる精神の上のみ成り立つのである。ほとんど阿諛に近い礼讃のみが喜ばれてゐる現状である。世のつねではあるとしても、新しい国の新しい事業がそれでは仕方あるまい。(二九四頁)

後に中島は「章魚木の下で」の中で、時局に対する作家の阿諛迎合的な態度やその文学を厳しく批判したが、ここにはそうした主張へと繋がる着想と表現が見てとれるのではないか。中島は「章魚木の下で」において、

文学が其の効用を發揮するとすれば、それは、斯ういふ時世に兎もすれば見のがされ勝ちな我々の精神の外剛内柔性——或ひは、気負ひ立つた外面の下に隠された思考忌避性といったやうなものへの・一種の防腐剤としてであらうと思はれるが、之もまだハツキリ言ひ切る勇氣はない。(二三三頁)

と韜晦的に述べているものの、書けないのであれば「作家といふ名前

は返上して、戦時下の国民の一人として戦争遂行に必要な実務にたづさはればいいのではないか」と書き、「戦争は戦争。文学は文学。全然別のもと思ひ込んでゐたのだ」と断言するに至る。もちろん「中島は、戦争に対しては当時の一般の受けとめ方とほとんど同じようなとらえ方をしていた²⁶⁾」とも解釈できようが、後の戦局の中で明確に「戦争」と「文学」を切り分けた点を重視すれば、「南洋群島」滞在中の読書体験——島木健作『満洲紀行』に描かれていた時局への「阿諛に近い礼讃」を排すべきとする主張に対する強い共感——が少なからぬ影響を「章魚木の下で」に与えていた可能性が指摘できるのである。

つまり中島敦は、「旅の手帖から」を経て「章魚木の下で」へと展開する同時代文学批判の根柢となる構想を、「南洋群島」滞在中に島木健作の『満洲紀行』の内容を通じて獲得していたのである。開戦当日の午後に読んだ『満洲紀行』が後の「旅の手帖から」や「章魚木の下で」に大きな影響を与えていたことは間違いなく、サイパンでの『満洲紀行』との出会いが晩年の「章魚木の下で」に結実する中島の文学的立場の根幹をもたらしていたといえよう。

四 「章魚木の下で」の意義

同時代の文学界における中島の批評的立場の基点をめぐっては、木村一信氏が、

中島はこのエッセイを、当時の文学界を一様に蔽っていた論調、すなわち上からの言論・思想統制にそったプロパガンダ的色彩の濃い文章に対して、批評精神、或いは作家精神に貫ぬかれた確かな眼とでもいふべきもので、ほとんど真正面から(多少共、検閲を顧慮したような表現も見うけられるが)対応し、それについての自己の所感を吐露していったと言えるのである。(三三三頁)

と指摘し、「章魚木の下で」の主張を「文学の効用」「文学者の在り方」「ほんもの」の文学の三点に集約している。また、中村光夫の評論「『近代』への疑惑^⑧」を読んでいた可能性も挙げた上で、その表現との関わりから必ずしも「中島の意見のみが独創的で、特に光彩を放つもの」とは言い切れない」と慎重に分析している。木村氏はさらに、「章魚木の下で」は、同人雑誌『新創作』の当時の編集責任者・船山馨が執筆を依頼したものであり、こうした当時の経緯^⑨を踏まえて、後年、終刊を迎えた『新創作』（一九四四年四・五月合併号、第三十八号）の「終刊の辞」の趣旨（文学の本性の純粹を説く内容）に「章魚木の下で」の主張が多かれ少なかれ影響を与えた可能性もあわせて指摘^⑩している。

これらに加えるならば、すでに述べてきた通り、中島は「章魚木の下で」執筆以前において、サイパン滞在中に、島木の『満洲紀行』を通して「現代」への向き合い方や、文学および文学者のあるべき姿をめぐる模索に着手していたことも指摘できよう。もちろん中島は『満洲紀行』の影響を強く受けながら、自身の南洋体験に根ざした実感を主体として同時代に対する批判的姿勢を確固たるものにしていくのであるが、そこに中島の独自性（「南洋群島」における『公学校国語読本』の編修作業や〈公学校〉の視察に基づいた批判など）が織り込まれていくことは、島木の「満洲」体験そのものと異なる部分であることは言うまでもない。

中島は「章魚木の下で」において、次のように述べている。「文学をする者にとつての現在の問題といふものが臆けながら判つては来た。そして「戦争は戦争。文学は文学。全然別なものと思ひ込んでゐたのだ」と省察していることは看過できない。中島は帰国後に時局的な多くの文章を目にし、「南洋群島」での「戦争と文学」を切り分ける自己の考えが〈内地〉にあつてもいまだ持続していたことを再確認するのである。こうした表現からは、「南洋群島」滞在中からす

に中島なりの「文学観^⑪」の一端が形成されつつあったといつてよい。ここで今一度、島木の「ある読書」の一節を引用してみたい。

昨年来、多くの文学者が満洲に渡つた。開拓地をも見て文章を書いた。（中略）私も彼等とおなじ文学者であつてみれば、提燈を持つよりは、不満な点を述べた方が見よいであらう。（中略）今日の満洲開拓地を伝へてゐるものとしては、これら文学者たちの断片的な記述以外にはないといふことを私は信ずることができた。（中略）文学者の眼は、他のどのやうな著者よりも眞実を見ているのである。（二八四頁）

じつにたくさんの見学旅行者の群が此頃は大陸へと渡る。（中略）しかしそのうちどれだけのものが、曇りのない眼^⑫でものを見てくるであらうか。ものの根底について考へてくるであらうか。私は率直に言つて、彼等の大多数のものから、多くを期待しようとはせぬのである。（二八六頁）

開戦当日の午後日記に記された「現代の良心」とは、しかるべき「文学者の眼」こそが「眞実」を伝える可能性を宿すものであり、かつそうした「眞実」を見定める「曇りのない眼」が単なる「机上の設計書」や国策的言辞に取り込まれるはずがないという「文学者」の〈矜持〉に対してなされた評価であろう。中島は、『満洲紀行』で示されたこの島木の作家的態度を開戦当日に高く評価したのである。中島は、この読書体験をもとに、ほぼ一年を経た晩年、「自分が何か實際の役に立ちたい願ひ」と「文学をポスターの実用に供したくない気持」（「章魚木の下で」）が「対立」する葛藤をいまだ持続させながらも、自身の確たる南洋体験を基に「戦争」と「文学」とを「截然」と「区別」し、韜晦的にはあるが、「戦争」と「文学」とが相容れない

ものであることを、あらためて同時代に問い直していたのである。

おわりに

以上で見てきた通り、太平洋戦争開戦当日の中島敦の『満洲紀行』(島木健作著)の繙読が遺稿「章魚木の下で」の同時代文学批判へと深まりを見せ、南洋群島での自らの見聞と相まって、戦争に迎合しない「ほんもの」(「章魚木の下で」)の文学を志向する姿勢を確立していく(受容)の過程が明らかになった。開戦当日の島木健作『満洲紀行』に対する「面白し」「現代の良心なるか」との感想が、一年後の「章魚木の下で」における文壇批判へと大きく(変貌)を遂げていくのである。

つまり、南洋庁編修書記としての実務体験^⑧に加えて、島木の『満洲紀行』の読書体験が、中島の帰国後の文学表現に多大な影響を与えていたといえよう。中島が「章魚木の下で」の中で戦時下の文学界への批判を繰り広げた背景には、島木健作『満洲紀行』の直接的な影響が明らかにみてとれるのであり、島木への〈強い共感〉が中島の晩年の文学的根幹の一端を形成していたことが指摘できるのである。

中島は開戦当日に島木の『満洲紀行』を読み、「面白し。蓋し、彼は現代の良心なるか」と高く評価した。「章魚木の島で暮らしてゐた時戦争と文学とを可笑しい程截然と区別してゐた」という考えの根柢には、島木の『満洲紀行』に貫かれた「人間に対する興味」と確たる「文学者の眼」に基づいた国策への「批判的な考察」に対する同感があつたのであり、しかるべき文学者の「書物」は「真実」を闡明するといふ島木の主張に直接触れたサイパンでの読書体験が大きく作用していたのである。

「戦争は戦争。文学は文学。全然別のものと思ひ込んでゐたのだ」と中島は明記している。「南洋群島」滞在中からすでに、「戦争」と「文

学」とを「截然」と切り分けて捉えていたことは重要である。そして帰国後も病に歿するまでその姿勢を持続させていたことから、少なくとも「戦争」と「文学」との関係性に対する中島の基本的な考えは一貫していた。「戦争」と「文学」とを明確に分離することで、時局に与しない「ほんもの」の文学を希求した帰国後の中島は、戦時下の阿諛迎合の風潮の中、「文学」の真価を見極める「曇りのない眼」によって、南洋を舞台とする作品や中国古典を素材とする作品世界に向き合っていたといえよう。

付記

中島敦の文章の底本は、筑摩書房版第三次『中島敦全集』全三巻(筑摩書房、二〇〇一・一〇・一〇、二〇〇一・一二・二〇、二〇〇二・一二・二〇)および『中島敦全集別巻』(筑摩書房、二〇〇二・五・二〇)とし、引用(収録巻の頁)は全てこれに拠った。また、島木健作の文章の底本は、『満洲紀行』(創元社、一九四〇・四・八)からとし、引用(頁)は全てこれに拠った。なお引用の際は、原則としてルビ・傍点・旧仮名遣いはそのままとし、旧漢字は新漢字へ改めた。

- ① 勝又浩「作家解題」(勝又浩編著『Spirit: 中島敦——作家と作品』所収、有精堂出版、一九八四・七・二〇) 四〇頁。
- ② 『新創作』第五卷第一号新年号、一九四三・一・一。
- ③ 木村一信「文学史的定位の基点——『章魚木の下で』を視座として」(『中島敦論』所収、双文社出版、一九八六・二・二二) 二九頁。管見によれば、中島の「章魚木の下で」を精細に論じた唯一の論考である。引用は二版(一九九一・八・一七)に拠る。
- ④ 前掲の木村論文。二五・二六、二九頁。
- ⑤ 田鍋幸信「中島敦 蔵書目録」(日本文学研究資料刊行会編『梶井基次郎・中島敦』〈日本文学研究資料叢書〉所収、有精堂出版、一九七八・二・二〇)。
- ⑥ 福田清人「島木健作の満洲批判」(『日本学芸新聞』第七十九号、一九四〇・二・一〇付) 三面。
- ⑦ 田村修一「島木健作について」(木村一信監修／外村彰編『外地の人々——〈外地〉日本語文学選』所収、龜鳴屋、二〇一一・五・二四) 九八頁。
- ⑧ 王玲玲「島木健作と「満洲」——『満洲紀行』を中心に」(『日本文学文化研究(城西国際大学大学院紀要)』第三号、二〇一四・五・二六) 六一頁。
- ⑨ 無署名「島木健作著 満洲紀行」(『ブック・レビュー』より) (『秘出版警察資料』第四十五号、警保局図書課、一九四〇・四・日付なし) 五一、五二頁。
- ⑩ 妻・たか宛書簡、一九四一年十二月二日付(『中島敦全集3』所収、筑摩書房、二〇〇二・二・二〇) 六四八頁。
- ⑪ 『南洋群島』第八卷第二号二月号、一九四二・二・一(船橋治編『復刻版 南洋群島』第二三卷、不二出版、二〇一〇・九・二四)。京城中学の一年後輩の友人氏名「三好四郎」の筆名で掲載された。
- ⑫ 仲程昌徳「旅の手帖から」と「章魚木」——中島敦の「南洋もの」新資料紹介」(『日本東洋文化論集(琉球大学法文学部紀要)』第六号、二〇〇〇・三・二四) 一九五頁。
- ⑬ 前掲の木村論文。三八頁。
- ⑭ 『文學界』第九卷第十号、一九四二・一〇・一。
- ⑮ 勝又浩「解題」(『中島敦全集2』所収、筑摩書房、二〇〇一・二・二〇) も参照した。六四〇頁。
- ⑯ 前掲の木村論文。三五頁。
- ⑰ 前掲の木村論文。二七頁。「文学などといふものが国家的目的に役立たせられ得るものとは考へもしなかつた」といった「韜晦的言辞やアイロニカルな表現を用いて、風潮への直接的な批判を避けている」とし、こうした言い方の背景には「一貫した文学観が存在している」と指摘する。
- ⑱ 拙著『中島敦の〈南洋行〉に関する研究』(おうふう、二〇一六・九・二二) 参照。